

飛車

なぎら☆ ソイスター

戸梶圭太

角川書店

なぎら☆ツイスター



戸梶圭太

角川書店

戸梶圭太（とかじ・けいた）

1968年愛知県生まれ。学習院大学文学部心理学科卒業。1998年『闇の楽園』で第3回新潮ミステリー倶楽部賞を受賞しデビュー。著書に、『溺れる魚』『the TWELVE FORCES 〜海と大地をてなずけた偉大なる俺たちの優雅な暮らしぶりに嫉妬しろ!』など。

なぎら☆ツイスター



2001年6月30日 初版発行

戸梶圭太

発行者／角川歴彦

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 〒102-8177 振替 00130-9-195208

TEL 営業03-3238-8521 編集03-3238-8555

印刷所／旭印刷株式会社

製本所／株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社営業部受注センター読者係宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Keita Tokaji 2001 Printed in Japan

ISBN4-04-873304-4 C0093

なぎら☆ツイスター



DAY-1



ようこそ 健康と人情の町
那木良へ

桜井たちの乗ったダークブルーの日産シーマ450
XLは、風雪に晒^{さら}されて腐蝕^{ふしょく}の進んだその立て看板の
傍^{かたわら}らを通^{とお}過^かした。

運転席の桜井は反射的にパネルの時計に目をやった。
午後四時八分前。

助手席に座っているよく日焼けした顔の滋野^{しげの}が、ふ
と笑いを漏らした。

「シュールな風景っすね」滋野は言い、「あれ」と顎^{あご}
を軽くしゃくくって桜井に外を示した。

桜井は窓の外を見た。

「畑のあぜ道をケータイでしゃべくりながら歩くド金

髪ガングロの女子高生。畑の隅には廃棄トラック。シ
ュールじゃないすか？」

「田舎の風景だ」桜井はそっけなく答えた。

前方からコテコテのヤンキー改造車、4ドアのソア
ラ、が爆音と共に現れた。

おそらく七十キロ近いスピードを出している。対向
車はまったくスピードを緩めることなく、あまり高級
さの感じられない唸^{うな}りを上げてシーマの横を擦り抜
けていった。すれ違う瞬間、開け放した車の窓からこれ
また牧歌的な風景にそぐわない激しいヒップホップビ
ートが聞こえた。

ちらつと見えた運転手は金髪のカギだった。

改造車はスキール音を立てながらあつという間に走
り去っていった。

「だせえスポイラー」

ルームミラー越しに改造車を見送った滋野が言った。
さらに五分ほど走ると、県道の左手に四階建てガラ
ス張りの巨大ショッピングモールが忽然と現れた。

桜井はそのショッピングモールが物質転送機で突如
この何もない平地に転送されてきたかのような錯覚を
覚えた。それくらい周囲の風景と違和感があるのだ。

古い建物から新しい建物へという時間の積み重ねがなく、何もない所に最新型の建物がいきなり出現する。

これもまた田舎ならではの風景といえる。

「でけえな」滋野が感心して呟く。

建物の前にはざっと見て五、六百台は収容できそうなんだっ広い駐車場。平日の昼間だからか、三割ほどしか埋まっていない。そこにもヤンキー系の改造車がちらほらと見られた。

「少し寄っていくか」桜井は言った。「軽く腹ごしらえをする時間はある」

桜井はモールの駐車場に乗り入れ、建物になるべく近いスペースに滑り込ませた。

ドアを開けて外に降り立つ。空気にはまだ夏の名残を感じられた。駐車場にはまったく人がいない。桜井はふと『ゾンビ』を思い出した。

滋野はワインレッドのシルクシャツにグレーのストライプスーツの上着を羽織り、前ボタンをとめた。無意識に明るい茶色の髪に両手をやり、撫で付ける。

桜井は胸の左側にポケットのついた紺色のオーソドックスな綿シャツに薄茶のパンツ、黒のアンクルブーツという格好であった。上着は羽織らずにモールの巨

大な入り口に向かって歩き出す。桜井の身長は百八十三センチで、歩き方には機械的な滑らかさがあった。だらりと両脇に垂れた腕は体のバランスの点から言えばやや長い。

その後をずんぐり体型の滋野が続く。背は桜井より頭半分低い。筋肉質な上半身をやや前屈みにしてのしとのしと威圧的に歩く。

入り口の自動ドアの脇に、飼い主が買物から戻ってくるのをじっと待っている柴犬がいた。見るからに年老いたよぼよぼの犬だ。頭部と体の数カ所、体毛が抜けて地肌が覗いており、そのことが飼い主もまた相応な高齢であることを想像させた。

建物の中の空気は外より乾いていた。

中央部分は吹き抜けになっていて、地下一階の噴水広場のベンチには小さな子供を連れた母親のグループ、男の老人グループ、それにジャージ姿のティーンエイジャーのグループがそれぞれたむろしていた。

館内全体には穏やかなストリングスのBGMが流れているが、中に入っているそれぞれの店舗にも個別のBGMがかかっている。

「二階がグルメタウンすよ」

滋野は案内図を見て、顎の下を指で掻きながら言う。
手首にはめた金のブレスレットが光る。

桜井は頷き、幅の広いエスカレーターに向かって歩き出した。

「なんだかこだけ完全な別世界すね」

エスカレーターに乗ると滋野は、桜井に遠慮したらしくわざわざ一段下がりに言った。

その通りであつた。

ここにいる間だけは都会人の気分であられるだろう。

だが一歩外に出ればわざわざ田舎の現実が待っている。

「さすが新しいだけあって綺麗だな」

滋野が首を巡らし、のんびりとした口調で言う。

だが桜井には、滋野が那木良に來たことで緊張しているのが手に取るようにわかつた。ここで腹ごしらえをして再び外に出ればそれからは緊張の連続である。

江藤と篠原も町の中心に向かう前にここに寄つたろうか。

桜井はそんなことを考えた。

フケたのか、殺られたのか。

まだ何もわからない。地元の室田一家は桜井たちの到着を待っている。だが、桜井は連中に会う前に誰に

も邪魔されることなく自由にこの町を見ておきたかつた。

井波社長は室田一家を信用している。大きなシノギを自らぶち壊すような真似をするはずがないというのが根拠だ。確かに組全体としてはそうだろうが、組織に異物が混じっていれば話は違ってくる。

グルメタウンには二十近い店があつて、客は注文した品をトレイに受け取り、中央のテーブルに持ち寄つて食べる形式であつた。

滋野は親子丼、桜井は天ぷらうどんを食つた。

食べながら桜井は、自分たち二人がひそかに注目されていることを全身で感じ取つていた。

よそ者に対する興味と不審の視線だ。ましてや滋野はやくざ丸出しの格好である。

少し離れたテーブルでみすばらしい身なりをした五十代くらいの男三人が、必要以上に体を寄せあい、紙コップ入りのドリンクを手に虚ろな目でどこもいえない空間を見つめている。三人の内では一番毛の少ないおやじはTシャツ姿で、白いTシャツには『那木良歩こう会』と黒字でデカデカと書いてあつた。いったい何十分、いや何時間、あそこでああしているのだろうか。

「あいつら、失業者すよね」

親子丼をががつと食い終わった滋野が、彼らを横目でちらりと見て、小さな声で言う。

「だろうな」桜井は食い終わった丼を目の前からどけて答えた。「あの空っぽの目はな」

「京テックの工場かな」

桜井は多分そうだろうと言うかわりに小さく頷いた。^{うなず}那木良町の京テック工場の閉鎖は新聞にも大きく載ったのだ。

「ニッターが進出したら、ああいうおやじらにやあ願ったりすよね。俺ら、すげえいいことしてますよね。失業者救うんだから」

滋野は楽観的なことしか言わなかった。

桜井はそうは考えていない。工場ができてほとんどのは作業はロボットが行なう。そのロボットを管理するのは人間だが、大して人手は要らない。この町の失業者を救うには程遠い。

それに、また爆発事故が起きるかもしれない。なぜなら事故の原因は未だに解明されていないからだ。しかし国内シェアナンバーワンの日東化工はあくまで肥大し続けようとしている。

「でも、また爆発したりして……」

滋野は楽しそうに言い、ひひつ、と小さく笑った。「爆発したところで死ぬのは俺らじゃない」

桜井は冷めた声で言った。滋野がくつ、くつと喉を詰まらせたような笑い声を立てた。

失業者たちが一瞬、二人に不審の目を向ける。

滋野がふいに笑いを引つ込め、真顔になった。

「桜井さん」

桜井は目で何だと問う。

「正直なところ、桜井さんはどう考えてます？」

滋野の顔には、俺にはさっぱりわからないと書いてあった。

「一千万ぼっちでも目のくらむ奴はいくらでもいる」

桜井は平坦な声で答えた。

もしも江藤と篠原が一千万円を持ってフケたのであるなら、桜井の組における立場は決定的にまづくなる。二人のうち、江藤は桜井の舎弟なのだ。だが、真相がわかってもないのにそのことでびくついてても仕方ない。とにかく町に乗り込んで調べることだ。それも早急だ。社長の井波は五日間しか猶予をくれなかったのだ。五日経って事の真相もわからず金も取り戻せなか

ったら、責任を取るのは桜井だ。一千万円など日東化工にとつてははした金であるが、もらった金が消えてしまったからまたくれと言われて「ああそうですか」とまた新たに一千万円ぽんと出すわけがない。

桜井なら無理して一千万円用立てできないこともないが、これまで築いてきた組織内における信用は回復できない。

半導体洗浄剤の製造において国内シェアナンバーワンを誇る日東化工の長野県野崎町工場が一年前、原因不明の大爆発を起こした。被害は工場から半径一キロメートルを中心に家屋やビルの全壊が八棟、一部損壊が二百七十二棟、従業員四人が死亡し、周辺住民を含め三十二人が怪我を負った。爆発の原因物質は半導体洗浄剤として製造されていた『ヒドロキシルアミン』である。これは爆発した場合にTNT火薬に匹敵するという一部の指摘があるにもかかわらず、消防法の危険物には指定されていない。

爆発事故の翌月、日東化工は住民との話し合いの場を設けた。その席で、顔がまるきりウツボみいだともつぱら評判の七十歳の本間清一社長は「当社には数

十億の金があるので、それで誠実に補償をしたい」と言い、さらに「IT産業の拡大に伴い半導体洗浄剤需要はますます増えてきているため、なるべく早く操業を再開したい」と悪びれることなく言い放ち、住民達を激怒させた。『日東化工爆発事故被害者の会』がすぐに発足し、町議会に立ち退きを請求する陳情を起した。そして陳情は町議会において全会一致で採択された。

日東化工はすぐさま次の工場を建てる候補地を水面下で探し始めた。大つびらに動くマスコミが騒ぎ立てるからである。近隣のいくつかの田舎町の中から群馬県的那木良という町が有力候補として浮かび上がった。この町は去年、京テックの部品工場が閉鎖されてからますます衰退しつつある。典型的独裁者である本間社長は新しい工場を那木良町に建てることを決め、さっそく根回しをするよう幹部連に伝えた。工場建設には地元住民の相当強い反発が予想される。ならばその芽を予め摘み取ってしまえばよい。

自らが田舎町で生まれ育った本間社長は日本の田舎町における地縁社会のしがらみを上手に利用する術を心得ていた。地縁社会は周囲がイエスといえどノーと

いえない社会であり、都会と違って周囲と意見が食い違っても自分は自分だと言ひ切れない社会であり、そして孤立が即社会的存在の否定に繋がる社会でもある。長引く不況は町から出ていきたくても出ていくことのできない人間を大量に生みだし、それが地域のしがらみをますます粘着質なものにしている。

那木良町には地元やぐぎである室田一家が根を張っていることがわかった。最近は産業廃棄物の不法投棄の仲介や風俗店や飲食店で使うおしぼりのレンタルくらいしかシノギがないらしい。急成長を続けて儲けに儲けている日東化工が彼らに工場建設反対運動をさりげなく潰してくれといえど二つ返事で引き受けるはずだと本間社長は確信していた。

だが会社の人間に直接室田一家と交渉させることは避けたかった。マスコミに漏れるとまた騒がれるからだ。幸い、本間社長には東京の水島会系暴力団の井波興業という会社の社長（要するにヤクザだが）と親交があった。

本間社長は井波興業の社長に「自分の会社と室田一家の間に立って交渉を進めて欲しい」と頼んだ。

井波興業の社長・井波勝は「喜んで引き受けましょ

う」と返事した。

その十日後には井波興業と室田一家の間で話がつかっていた。

室田一家は反対運動潰しだけでなく、工場を建てる土地を譲ってくれる地主を探し始め、すぐに平地に二千坪を所有する、那木良に住んでいるある男に話を持ちかけた。

偶然にも地主はその土地を手放そうとしていた矢先であった。詳しく言おうとはしないが、何か妙なことに手を出して膨大な借金をこしらえたらしかった。土地の評価額よりずっと大きな金額を提示され、大喜びした。

だが彼は条件をひとつ出した。

それは土地の代金とは別に、今すぐ一千万円を現金でくれ、といういささか風変わりな要求であった。

室田一家はそのことを井波社長に伝え、井波社長が日東化工の本間社長にそのことを伝えた。

「わかりました」

本間社長はあっさり承諾した。一千万円といえど本間社長には、三、四日料亭で遊ぶ金に過ぎない。

一千万円が用意され、誰が地主に届けるかというこ

とになった。

土地を提供してくれる地主を見つけたのは室田一家だから、室田一家の人間が持つていくのがこの場合、道理であるが、井波社長は自分の部下を那木良に送り込むことにした。一千万という金額は室田一家が一方的に伝えてきた額であり、本当はもっと少ないかもしれない。つまり室田一家が金額を水増ししている可能性を考えたのだ。もっと悪い場合、その話自体が嘘であるという可能性もある。もしそうであるなら室田一家は井波興業をナメているということになり、それは絶対に許されないことである。金を出すのはどうせニッソーだからという理屈など通用しない。日東化工との今後の円滑な関係にも支障をきたしかねない。だから井波は自分の部下を送りこみ、地主に金を渡す瞬間まできちんと見届けさせ、地主と室田一家に密約がなかったか確認させることにした。

一千万円の運び役は若手の幹部候補の力を試すのに良い機会であった。井波社長は江藤と篠原という若い社員に白羽の矢を立てた。

江藤は二十七歳、篠原は二十六歳。二人とも組織で頭角を表わすために競うライバルであった。互いの兄

貴分がライバル同士ということもあり、普段からそれほど仲は良くない。

二人は一千万円の詰め込まれたアタッシェケースを持って車に乗り込み、那木良へ向かった。二人は那木良に到着すると駅前のホテルに部屋をふたつ取り、それから少し離れた室田一家の経営している会社へ車に向かった。

室田一家は組員総出で、花道まで作って二人を快く迎え入れ、歓迎した。酒宴を開き、女をあてがった。宴は明け方まで続いた。

午後には問題の地主と会わなければならないので二人はとりあえず車を置いてタクシードホテルに戻っていった。

午後になり、約束の時間に室田一家の若衆が江藤と篠原を迎えに来たが、二人はいなくなっていた。

フロントに訊いてみたところ、確かに明け方戻ってきたがそれからほどなくまた二人で出かけたという答えが返ってきた。

江藤と篠原は一千万円の入ったケースと共に消えた。組長の室田は即座に井波興業に電話を入れ、問題が起きたことを伝えた。井波社長は事態を重く見て、江

藤の兄貴分である桜井を那木良に向かわせることにした。

井波から電話がかかってきた時、桜井は渋谷のブックファーストにいた。レジカウンターで文庫本の代金を払おうとしていたのだった。

「すぐに俺んところへ来い」と井波に言われると桜井は尻ポケットに文庫本を突っ込み、大股で人を押し退けながら本屋から出た。路肩に堂々と違法駐車したシーマに乗り込むと数人の通行人を蹴散らして会社の事務所へと急いだ。

「本来ならお前と村越をいさせるのがスジだが、村越は今、あの体だ。だからお前が一人選んで連れていけ」

村越とは消えた二人の内の片方、篠原の兄貴分であった。桜井とはライバル関係にあるが、先月発狂したテレクラの元経営者に脇腹を刺されて負傷し、まだ入院中である。幹部としての実力は井波の言葉で「58と42」といったところだ。勿論桜井が58である。

「日東化工にこのことを知られるとまずい。信頼関係にひびが入る。速やかに静かに動いてコトを見極めて

こい」

「今すぐに？」桜井は訊いた。

「あたり前だろ」

井波は苛立つていた。

「コーちゃん、その手どうした」

先々週五十歳になったばかりの稗田誠こと「マー坊」はめざとかった。

「ああ、これか……」

「コーちゃん」こと同じく五十歳の藤岡耕平のしみだらけの顔はいつになく暗かった。

「コーちゃん、まさかまた……」

マー坊とコーちゃんの間座った五十一歳の能代太一が言いかけたのを遮って、コーちゃんは暗い声で言った。

「誰も殴ってねえよ。壁を殴ったんだ」

太一とマー坊は無言でその先を待った。

「充の奴、また仕事辞めやがった」

「ええ？」

「だってまだ……」

太一とマー坊は同時に口を開いた。

「三日で辞めやがった」コーちゃんは吐き捨てた。

「馬鹿が……」

三人の周囲の空気だけが重たく、辛気くさい。

「馬鹿が」コーちゃんはもう一度吐き捨てた。

「今度はえらく短かったな」マー坊が言う。

「せっかく就職したのにもつたいねえ」太一が情けない顔と声で言う。

「もつたいねえとか、そういう考えがねえんだ、あいつは……馬鹿だから。まったく、本当にぶつ殺してやろうかと思つたよ」

コーちゃんは齒をくいしばり、擦りむけた右の拳を握り締めた。

「でも、よく我慢したな、コーちゃん」

マー坊は息子を殴らなかつたコーちゃんを尊敬の目で見た。

コーちゃんはマー坊の方を向き、左側が黄色く濁つた目で睨むと言った。

「殴ろうにも目の前にいなきや殴れねえだろ」

太一とマー坊は同時に眉をひそめた。

「あの馬鹿、夕方ケータイから家に電話してきてこう言いやがったんだ。『上司がむかつくから辞めた。今夜はメシ要らない』。真剣さが足りねえんだよ！」

コーちゃんは爆笑しそうであった。

「おまけに仕事もしねえくせに車いじりにばつかめり込みやがって……自分がどういいう状況にいるかわかってねえんだ、あの馬鹿野郎は」

太一がため息をついた。

「今のわけえ奴は、ちよつと何か気に入らないとすぐにやめるよなあ。やめたら生活できないのに、それでもすぐやめるよなあ。どういいう神経してんだかなあ、まったく」

「茂君は本当に偉いよ」コーちゃんは太一の一人息子^{しげ}の名を挙げた。「ちゃんと嫁さんもらって養つてるもん。ウチの馬鹿とはえらい違いだ」

「充君も嫁さんもらえばもうちつとしつかりするんじやねえのかなあ」マー坊が言う。

コーちゃんは首を振った。

「嫁をもらって子供ができればまじめに働くなんてえ論理は大昔のもんだよ」

そう言われるとマー坊は言い返せなかった。

「それにこの町にまともな嫁になれる若い女なんかいるか？ どいつもこいつも売春婦みてえなカッコで職安の列に並んできやあきやあ騒ぎやがって。まじめに働こうていいう気がこれっぽっちもねえんだ」

失業してからというもののコーちゃんの町と町の人間に対する敵意は日に日に膨らんでいた。

コーちゃんとマー坊と太一は、三人ともこの町で生まれ育ち、三人揃って同じ小中学校に通い、高校も同じ工業高校で、卒業するとこれまた三人揃って京テックの部品工場に就職して二十七年間働き続け、そして三人揃って失業した。

コーちゃんは二十九歳で結婚して、充という二十歳の息子がいる。太一は二十六で結婚して、茂と知広という二人の息子がいる。

マー坊は三十一歳で結婚し、春子という十九の娘がいて、今は大学浪人だ。

コーちゃんたち三人のような大人には仕事がない。

彼らの息子たちのような若者には、仕事はないことはないが、皆気に入らないとすぐにやめてしまう。東京に出て働こうにも親が失業しては何の援助も期待できない。また本人にも東京でしか実現できない夢が

あるのならともかく、わざわざ苦勞して東京で働こうなどという気はない。だからいつまでも実家にいる。「茂はまあいいとして……知広の奴はどうにもなんねえ」

太一はさりげなく愚痴をこぼした。「最近就職安にもいかねえで、一口中、部屋に籠もってるよ。ゲームばっかやってんだ」

「真面目でいい子なのになあ」マー坊が言う。

「真面目だが大人しすぎるんだ。だから就職できねえんだ。しっかりしろと言っても返事もやしねえ」

「あんまり追いつめちゃ駄目だぞ」コーちゃんが釘を差す。「本人だつて悩んでるんだから」

「そうは見えねえよ」太一は反論する。

「知広君は少なくともウチの充よりはまともだよ。充の野郎、ここところしよっちゅう外泊してやがるんだ。たまに帰ってきてても口もきかないし、俺がどこで何やってんのか訊いてもまともに答えやしねえ……」

「女じゃないのかい？ コーちゃんに似てプレイボーイなのさ」

マー坊が場違いなジョークを飛ばす。

「よせやい」コーちゃんは言うが、口元が緩む。彼に

は三人の中で一番抱いた女の数が多という自覚があるのだ。

重たく辛気くさい空氣がほんの少しだけ和らぐ。マー坊が染みのついた白いシャツを指でつまんで臭い^{にお}を嗅ぐ。

「ところで今度はいつ職安に行く？」

よせばいいのに太一がまた重たい話題を出す。決して口にすることはないが、コーちゃんは太一の出っ歯を見ているだけですます暗い気分になってくる。

「そんなにしょっちゅう行つても、求人内容は変わねえよ」

コーちゃんは投げやりに言つた。

職安の列に並ぶのは不愉快な経験以外の何物でもない。何といつても我慢できないのは、職安を溜まり場と勘違いしているケバケバしくて礼儀知らずの若い連中と同じ空間に身を置くことだ。連中はけたたましい声で笑ひ、携帯電話でセックスの話題を喋りまくる。数少ない求人^{しやべ}をさらうていくのは大抵そういう連中なのだ。そしてすぐに辞める。

コーちゃんは自分がいつか爆発して職安で若者に殴りかかってしまふような氣がしていた。